

江戸時代の旅と紀行文

杉戸 清彬

はじめに

国際コミュニケーション学部では平成一八年六月一七日に「旅」をテーマとするフォーラムを開催した。参加者は多く本学部の学生だった。その時に行った報告の概略を以下に記す。もとより「江戸時代の旅」について特に研究してきたわけでもなく、その面については神崎宣武氏の『江戸の旅文化』（岩波新書）等に大きく依拠したことを始めにお断りしておく。私はそこから江戸時代の旅についていろいろ知ることができ、その一部を報告の中で述べたが、主要な関心は「紀行文」の部分にあったと了解していただければ幸いである。

一 旅のいろいろ

ここでは江戸時代の旅を大まかに分類した。

- 一 大名の旅（参勤交代に伴うもの）
- 二 商人の旅（仕入れ、行商など）
- 三 信仰の旅（伊勢参宮、大山詣で〈神奈川県伊勢原市阿夫利神

社……江戸に近いので落語の題材になるほど気楽に行われた）、富士登拝、善光寺参り、厳島参拝、日光見物、江ノ島詣で、金比羅参り、西国三十三所（観音霊場）廻り、四国八十八所巡礼など。

四 名所廻りの旅（京見物、大和廻り、江戸参府 など）

五 湯治の旅（有馬、別府、箱根、熱海、伊東、修善寺、那須湯本、城崎 など）

六 隠居した女性の旅（信仰、名所廻り、湯治など目的は様々）

七 学者や文人の旅（貝原益軒、橘南谿、菅江真澄、本居宣長、松浦武四郎、問宮林蔵、伊能忠敬、松尾芭蕉 など）

八 その他、武者修行の旅、忍者や隠密の旅も、時代小説には欠かせない。

江戸時代には東海道や中山道などが整備され、宿場も用意された。右のように見てくると気楽に旅をしていたような感じを持つが、実際どうであったかは私にはよく分からない。すぐに思い浮かべるのは、芭蕉の場合である。芭蕉の紀行文として最初に『野ざらし紀行』

があるが、その最初の句は「野ざらしを心に風のしむ身哉」であり、「野ざらし」とは「野に捨て去られた髑髏」である。芭蕉は自分が旅の途中で死ぬのかもしれないと覚悟しているように見える。故郷の伊賀上野で母の菩提を弔った後、大垣に着いた芭蕉は「しにもせぬ旅寝の果よ秋の暮」という句を作った。「野ざらし」の句に対応するものである。また、芭蕉の紀行文で完成にまで至ったただ一つの作品『おくのほそ道』では、陸奥国から出羽国へ山を越える時道案内にたった「究竟くわいごうの若わかもの」が反脇指そりわきさしと櫂この杖を携えて、「けふこそ必ずあやうきめにもあふべき日なれ」とこの山越えを案じつつ先導している。しかし何事もなく最上の庄について「この道必かならず不用ごうようの事有り。つゝがなう送りまいらせて仕合しあわせしたり」（芭蕉の引用は小字館「新編日本古典文学全集」『松尾芭蕉集』による）などと言っていることなどから、旅の安全が必ずしも保証されていないようにも思われる。

多くの旅人がいたのだから、江戸時代の旅が常に危険にさらされていたとは思わないが、時には思わぬ事態が待ち受けていることを覚悟せねばならなかったようにも考える。
実状はさてどんなものだったのだろうか。

二 旅の案内書

- ・道中記（東海道、明暦元 一六五五）
- ・諸国案内旅雀（貞享四 一六八七）

- ・伊勢参宮按内記（宝永四 一七〇七）
- ・日光名勝記（正徳四 一七一四）
- ・都名所図会ずえ（安永九 一七八〇）
- ・大和廻り道の枝折（天明三 一七八三）
- ・伊勢参宮名所図会（寛政九 一七九七）
- ・旅行用心集（文化七 一八一〇）
- ・西国巡礼略打大全（文政十一 一八二八）
- ・芸州巖島図会（天保十三 一八四二） など

三 紀行文（文芸作品を含む）等

- ・東海道名所記（浅井了意）
- ・おくのほそ道（芭蕉）
- ・東海道中膝栗毛（十返舎一九）
- ・伊勢参宮献立道中記（志度の浦講中のある人）
- ・御陰参宮文政神異記
- ・東海道五拾参次（安藤広重）
- ・庚子道乃記（享保五、武女たけじよ）
- ・信濃のみちの記（天保年間、志村節花尼きよはな）
- ・東海紀行（天和元 一六八一、井上通女）
- ・西遊草（清河八郎）
- ・真澄遊覧記（菅江真澄）
- ・躡旅漫録（滝沢馬琴）

・岡部日記（賀茂真淵）
 ・菅笠日記（本居宣長）
 ・月瀬記勝（斎藤拙堂）
 ・大和廻（貝原益軒） など

二と三に挙げたものを見ると旅に関する多種多様な書物が普及していたことに驚かざるを得ない。ここに挙げたもの以外にも旅にかかわる書物は多かったと思われる。

興味のある方は、どうしたらこのような本を読むことができるか、試みてほしいと願っておく。

四 「おかげまいり（抜け参り）」について

- 一 慶安三（一六五〇）年 江戸の商人発 一日五〇〇〜二五〇〇程（五月位まで）
 - 二 宝永二（一七〇五）年 京・大坂発 閏四／九〜五／二九まで五〇日間で三六二万人。（『玉がつま』による）
 - ※享保三（一七一八）年 元日〜四／一五まで四二七、五〇〇人。（『よのつねのとしなり』）
 - 三 明和八（一七七二）年 丹後、宇治の女子集団発 四月〜七月で二、〇七七、四五〇人。
 - 四 文政十三（一八三〇）年 阿波の子供の抜け参り発 三月〜八月で四、五七九、一五〇人。
- （道中で「伊勢音頭」、畿内で「おかげ踊り」大流行。）

※参考（「Wikipedia」より）

お蔭参り（おかげまいり）とは、江戸時代に起こった伊勢神宮への集団参詣運動。数百万人規模のものが、60年周期に3回起こった。伊勢参りとも。

お蔭参りの最大の特徴として、奉公人などが主人に無断で、または子供が親に無断で参詣したことがある。これがお蔭参りが抜け参りとも呼ばれるゆえんである。幕藩は規制を敷いたが、効果は無かった。流行時にはおおむね本州、四国、九州の全域に広がったが、真宗地域には広まりにくかった傾向がある。有名なのは、おふだふりである。村の家々に神宮大麻（お札）が天から降ってきたと言う。これは伊勢信仰を民衆に布教した御師がばら撒いたものだともいわれる。

おかげ参りは、江戸の旅の中でも特異なもので興味を引かれる。なぜそのようなことが何回も行われたのだろうか。文政の時代、日本の人口は大体二九五二万人程だったという（金森敦子著『伊勢詣と江戸の旅』（文春新書）から、一五・五%、約六人に一人が伊勢に来たことになる。やはりこれは驚異的な数字と言ってよいのではなかろうか。御師おんし（神宮のお札を配って全国を歩き、地方の人たちが伊勢に来るときはその宿を提供し、神樂奉納の世話もした）の影響も大きかっただろうが、それだけでは説明できないように思う。今までの研究の蓄積も当然あると思うので、機会があれば調べるようにしたい。

五 文芸作品の文章について

一 仮名草子『竹斎』に見られる道行文

誰かは止めし関が原、不破の関屋の板廂、戸板も壁も崩れ果て、衣は薄し咳気して、洩も垂井の宿に著き、薬を飲めば禁物は、冷えの物とて大垣の、下手の医者に掛りつ、又もや辛き病をば、起の渡り越えければ、濡れ渡りたる萩原の、震いの立つや一の宮、日数積もりて清洲の宿、命名古屋に著きにけり。

さて小さき町に宿を借り、看板をこそ出しけれ。「天下第一の藪医者竹斎」、側に一首の歌を書く。

扁鵲や耆婆にも勝る竹斎をしらぬ人こそあはれなりけれ

(日本古典文学大系『仮名草子集』から引用)

七五調で、地名(歌枕の場合が多い)を折り込みながら、掛詞や縁語などを駆使する、古文の中でも特異な文体。これを「道行文」と呼ぶ。有名なのは『平家物語』の「海道下り」や『太平記』の「俊基朝臣再び関東下向の事」、また、近松門左衛門の心中物に見られる「心中の道行」などである。

江戸時代の初期に仮名草子と総称される書物があった。『竹斎』もその一つだが、かなりの評判を得た。芭蕉の発句にも「狂句ががらしの身は竹斎に似たる哉」という有名なものがある。この句が作られたのは名古屋のテレビ塔の足元で、今そこには「蕉風発祥之地」のモニUMENTがある。

藪医者竹斎は、京都にいたがうだつが上がり、江戸に向かう。

これは『伊勢物語』「東下り」(三河の八橋で「かきつばた」の五文字を五七五七七の各句の頭において旅の悲しさを和歌にした話などは高校の教科書にもあったと思う)のパロディでもある。引用したのは関ヶ原から名古屋まで、身近な所を取った。

竹斎は風邪気味だった。「誰かは止めし関が原」「関」は止める所だが、誰も竹斎の咳を止められない。「不破の関屋」は古代の関所「不破の関」に係わる建物だが、歌枕として有名なものであって実態は問題にならない。あの藤原定家と同時代の最高位の貴顕にして天才的な歌人でもあった後京極摂政良経が「人住まぬ不破の関屋の板廂荒れにし後はただ秋の風」と詠んだ荒廢のイメージを持つ。それゆえ、風を遮ることもできず、薄着の竹斎は咳も止まらず、鼻水も「垂れる」。その垂井で薬を飲んだから、腹が冷えるといけないので柿も食べられなかったが、「おおがき」の下手な医者にかかることはできなかった。(そこから美濃路をとって)木曾川を起の渡りで「脛」を濡らして渡って再び辛い病を「おこし」たが、萩原(「脛」と「萩」の掛詞)、体の震いも立ち、神社も立つ一宮、そして清洲を通り、ともかく命「なごや」か? に名古屋に到着した。そこで狂歌を一首詠む。「扁鵲」は中国、「耆婆」はインドの伝説的名医だが、自分はそれにも勝ると大口をたたいている。

『平家物語』や『太平記』の道行文は死を覚悟した凄絶なもの、『伊勢物語』の「東下り」も都を離れていく哀感に満ちるが、『竹斎』はひたすらふざけに興じる。いかにも江戸時代の文芸であるが、作者の富山道治はそれを読み取ってくれる読者を期待していたし、そ

のような読者もいたのである。

二 『菅笠日記』の文章

「菅笠日記」を、著者本居宣長は「すががさのにき」と読んでもらいたかった。この日記の末尾は「よしや匂ひのとまらずとも。後しのばん形見にも。その名をだにと。せめてかきとめて。菅笠の日記。」となっている。『万葉集』（新編国歌大観）には「菅笠小笠（すががさ）をがさ」の一例のみ。「すががさ」は江戸時代に二例のみ。宣長は『万葉集』の読みに従い、「日記」も「にき」と王朝風に読んだ。

この日記は、宣長が門人達と共に吉野の桜見物、父親が宣長生誕を祈願した吉野水分神社参拝、そして飛鳥・大和の古代史検証を意図した旅の記録である。ここではそれに何が書いてあるかということよりも、どのような文体で、何を記したかを簡略に記す。

『菅笠日記』では音読語を原則として用いない。宣長は平安朝物語文学（『伊勢物語』や『源氏物語』など）の文章にできるだけ近い形で書くことを試みた。何故か。そうすることが自らの学問に必要な修練と考えたからである。

極端な例を挙げる。宣長は「此くろぎきに。家ごとにまんぢうといふ物をつくりてうるなれば。」とするが、「饅頭を作りて売る」ではなぜだめなのか。考えられるのは「饅頭」が音読語であり、平安朝に用例がないからである。かといって他に言い方はない。そこで「といふ物」を挿入して和らげようとした。

岡寺へ行った時には、満堂に参詣する様子を「数もしらずまうでこみて」と記した。「まうでこみて」は『源氏物語』「玉鬘」の巻に一例だけ見られる語である。場所は初瀬（長谷）寺、「いとさわがし人まうでこみての、しる。」（新日本古典文学大系より）。宣長はこの用例を頭に置いて『菅笠日記』を記した。

このような例は数え切れない。宣長は自らの修練と共に、これを読む人の内の誰がそれに気がついてくれるかという期待も持っていただろう。古典を媒介にして心を通わせ合うことを願っていたと言え換えてもいい。

宣長は飛鳥村へ行った時に「こはまことの飛鳥井の跡などにはあらぬにや。」と記した。この時、宣長の脳裏には催馬楽の「飛鳥井」があった。

飛鳥井に宿りはすべし や おけ 蔭もよし みもひも寒し
みまくさもよし

この素朴な古代歌謡に見える「飛鳥井」の場所に宣長は関心を持たざるを得なかった。

飛鳥・大和は古代遺跡の宝庫であり、『古事記』や『日本書紀』、『延喜式』に載る天皇陵、宮跡、神社がこの地域にある。しかし、その正確な場所は分かっていたいなかったし、現在に至っても新説が続出している。

持統、文武両帝の都である藤原京の位置さえ分からなかった。宣長は飛鳥井の近くにある大原寺、別名藤原寺の寺僧が藤原京はこの地であると語ったことに疑問を持った。宣長の今居るのは飛鳥の東

端といつてよい所で、中臣鎌足の母、大伴夫人^{おほとものむすめ}誕生の地であり藤原氏ゆかりの土地であることは否定できない。しかし、と宣長は考える。『万葉集』の有名な「藤原宮御井歌」には「大和の 青香具山は日の経^{なほ} 大御門に 春山と 繁^{しげ}さび立てり」とある以上、藤原京は香具山に近かった筈である。しかし、今居るところは香具山からは離れている。自分はこの大原の里が、香具山の近くにあつて、藤原宮もここなのだろうと思つていたが、実際に来てみたところ、香具山とははるかに隔たつていて今までの考えは間違つていたと思わざるを得ない。藤原の里は確かにこの地であろうが、宮の藤原はことは違つて、香具山のあたりにあつたと宣長は推量した。最近の説では、藤原京は畝傍、耳成、香具山のいわゆる大和三山をもその域内に含む、後の平城京よりも大きな中国風の都だったという「大藤原京説」が有力視されているようである。

この旅をしている間、宣長の頭から、古代の大和、『古事記』、『日本書紀』が消えることはなかった。宣長はそのような旅をし、それを和文で書いたのである。

津に居た漢学者で『和訓栞^{わくしのしげ}』の著者でもある谷川士清^{こしのすが}は望んでこの書を読み、宣長への書簡の中で「さてさて委しき御考どもにて御座候。」と述べた後、「茶屋は、なかなか茶店よりはよろしかるべし、唐土には貨湯家などの称も見えたれど、西土の称谓は、此書にはすまじりなるべし」(筑摩書房版『本居宣長全集』別巻三「来簡集」より)と記している。士清も『菅笠日記』のなかにある「茶屋」という語にこだわったのだが、「貨湯家」などという語を宣長が使うは

ずがない。なぜこのような贅言を弄んだのか、私には理解できない。でいる。

おわりに

『竹斎』や『菅笠日記』をどう読めばいいのか、簡単だが今考えていることを述べた。両書とも文章は読みやすいと思うが、表面を上滑りしても何も理解していないという結果になると思う。江戸時代の文芸は、それ以前の文化が頭の中にないと、本当の所は味わうことができない。少なくともそういうものもあることは今まで述べてきた所で明らかだろう。作者と読者が共通の基盤の上に立つて心を共鳴させることができれば、そこには豊かな場が醸し出されるように思う。その典型は数人の人が一堂に会して行われた「俳諧」だろう。俳諧は中世の連歌から続く「座の文芸」である。世界の文芸を見渡しても類例のない存在だと言われる。

そのような文芸を今後とも楽しみながら読み続けたいと思つている。